
二つの夜

向こう側

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの夜

【Nコード】

N9062K

【作者名】

向こう側

【あらすじ】

月の呼吸の音さえ聞こえそうな程の、静かな夜。僕はリビングのテーブルに座り、コーヒーを飲んでいた。時計が針を進める音だけが、辺りに響いていた。僕は何を思うわけでもなく、瞳を閉じたり、手を見つめたりしていた。

人の気配がして後ろを振り返ると、七歳になる娘が立っていた。暗闇の中、薄紅色のパジャマだけが浮かび上がっていた。僕は何故か、娘は僕の命を奪いに来たのかもしれない、という錯覚に襲われた。冷たい汗が、背中を伝った。僕は娘を恐ろしく思ってしまった。

自分の思いを吹き飛ばすために、強い声で言った。

「どうしたんだ、眠れないのか」

「うん」娘は不安そうに言った。僕に怒られるんじゃないかと心配しているのだ。

幸いな事に、明日は日曜日で僕の仕事も休みなので、娘を横に座らせ、すこしお喋りをする事にした。それに、さっき僕が感じた不吉な思いは間違いで、僕は娘を愛しているんだという事を確認したかった。

月の呼吸の音さえ聞こえそうな程の、静かな夜。僕はリビングのテーブルに座り、コーヒーを飲んでいた。時計が針を進める音だけが、辺りに響いていた。僕は何を思うわけでもなく、瞳を閉じたり、手を見つめたりしていた。

人の気配がして後ろを振り返ると、七歳になる娘が立っていた。暗闇の中、薄紅色のパジャマだけが浮かび上がっていた。僕は何故か、娘は僕の命を奪いに来たのかもしれない、という錯覚に襲われた。冷たい汗が、背中を伝った。僕は娘を恐ろしく思ってしまった自分の思いを吹き飛ばすために、強い声で言った。

「どうしたんだ、眠れないのか」

「うん」娘は不安そうに言った。僕に怒られるんじゃないかと心配しているのだ。

幸いな事に、明日は日曜日で僕の仕事も休みなので、娘を横に座らせ、すこしお喋りをする事にした。それに、さっき僕が感じた不吉な思いは間違いで、僕は娘を愛しているんだという事を確認したかった。

「お客様、ご注文は何にいたしましょうか」僕はもっともらしく言った。

「じゃあ、ホットミルクをお願い」彼女は気取って言ってみせたが、くすくすという笑いがもれていた。

「駄目じゃないか、笑ったら」

「だってパパの言い方がおかしいんだもん」

父娘間の他愛もない遊びだ。ままごとの延長のようなもので、どちらかが勝手に役を決めたら、それにしたがわなければならないという遊びで、娘が考えた。妻と別れてから、この手の遊びでよく娘と触れ合うようにしている。

ホットミルクを飲み、一段落したところで娘が言った。

「ねえ、パパ、お話してよ。いつもやってるやつ」

「ああ、良いよ。で、どんな話が良いのかな」

「うーんとね、パパの子供の頃の話が聞きたい」

「子供の頃かー。ちよつと待てよ、今、思い出すからな」と言いながら、僕は最初の一文を考えた。ここでいう話とは実際にあった話ではなく、即興の考える作り話だ。娘もその事が分かっていて、どうにかして僕を困らせようと、あれこれ質問してくる。僕はその質問に答えながら、物語の細部を固めていくのだ。この話の中で、僕は、海底の秘宝を求める海賊にも、木星到着を果たした宇宙飛行士にも、空に存在する王国の王子にも、なったりした。

「僕には子供の頃。親友がいた」いつもよりは単純だが、たまにはこういうのも良いかもしれない。

「パパの親友はどんな子供だったの？」

「あらゆる面で、僕とは正反対だったよ。僕はその頃、内気で、おとなしくて、本ばかり読んでた。でも、彼は活発でいっつも外を駆けまわってたな」

「どうして、そんな二人が友達になったのかしら。」

「それが僕にも分かんないんだ。気付いた時には、いつも一緒にいたって感じかなー」

「恋人はいた？」

「えっ」僕は聞き返した。

「その二人に恋人はいたの？」と娘は言った。もうそんな事に興味があるのか、と僕は少々驚いた。

「彼にはいた、つまり、僕には居なかったってことになるな。でも、実を言うと僕も彼の恋人の事が好きだったんだけどね」

「じゃあ、なんでその事を彼の恋人に言わなかったのよ」と娘は怒ったように言った。

「だってその頃、僕らは小学生だぜ。そんな大げさなもんじゃないよ。それに彼は僕の親友だったしさ。彼なら彼女にぴったりだ、なんて子供心に思ったんだよ」

「訳わかんない」と娘はふてくされたように言った。その表情が驚くほど別れた妻に似ていたので、僕は焦った。別れる直前はいつもこんな顔してたっけ。

娘が気に入ってくれそうに無かったので、話の展開を変えることにした。

「でも、ある日、そんな三人に事件がおきる。どんな事件だと思う？」

話の続きが浮かばない時は、娘に聞いてみる。大人の頭ではまず浮かばないだろう事を言ってくれるので、楽しい。

「うーん」と言いながら娘は頭をひねっている。この時間が僕を考える時間になる。

「その女の子が転校しちゃった？」

「違う。」

「じゃあ、その女の子の気が変わっちゃったんだ。」

「違うな」

「じゃあ、分かんないよ。教えて。」

「僕の親友は殺されたんだ」言ってからしまった、と思った。人が殺される話なんて、七歳の娘にする話じゃない。

「誰に、何で、殺されたの？」娘は驚くこともせず、質問してきた。そんな娘に僕が戸惑ってしまった。

えーとな。と言いながら僕は立ち上がり、腕時計を見た。

「もう遅いし、続きは明日にしないか」今なら、まだ、修正は効く。最後に親友が行き返る事にすれば良い。

娘が僕の服を掴んで、座らせようとする。

「続きを話して」娘の目は今までに見た事がないくらい、真剣だった。

辺りの暗闇が濃くなっていくような気がした。僕は座って、コーヒーを口に含んだ。コーヒーはもう、冷めていた。

「誘拐されたんだ。彼の家はお金持ちだったからね」

「それで、どうなったの？」するりと娘が聞いてきた。誘拐の意

味を知っていたのだろう。

「犯人側の要求は二つだった。一つはお金を用意する事。もう一つは警察に通報しない事。この二つを守れば子供は無事に帰す、と約束した。逆を言えば、この二つの事が守られなければ……」

「子供は殺されるって事ね」娘が引き継いで言った。娘の口から「殺される」なんて言葉が発せられた事に僕は恐怖を感じた。娘は本当に僕の命を奪いに来たのかもしれない。喉がからからに渴いていた。コーヒーを飲んでも、その渴きは満たされる事が無かった。

「それで結局は子供は死んじゃったんでしょ」

「ああ、彼の両親は約束を守った。でも、犯人は約束を守らなかった。犯人が子供を帰したと言った場所には、彼の死体があった」

「悲しかった、彼が死んだと知った時？」

「もちろんって言っても、最初は彼が死んだなんて信じられなかった。彼女が彼の葬式で泣いていたの見て、初めて分かったんだ、彼はもういないだってね」

「どんな気持ちだった、その時は」

「良くある表現だけど、ここにぽっかりと穴が空いた気分だった。そこから何かが漏れて、何かが乱暴に入ってきた」

「それって具体的にはどんな気分なの？」

「えーと、そうだなあ。夢から急に覚めた気分って言ったら分かるかな」

「うーん、なんとなく」

「僕は自分が何者で、何をしなければならぬか分からなかった。実際、その頃の記憶はなんか、曖昧なんだ」

「そう、で彼女はとうなったの？」娘は僕の事には興味が無いようだった。

「彼女も僕と同じ気分だったんじゃないかな。だから、僕と付き合ってくれたんだと思う」

「彼との思い出を共有するために？」

僕は驚いて娘を見た。僕の言いたい事が娘には分かっているよう

だった。なんだか、一生分驚いたような気がした。

「でも、そんな事上手く行くはずが無いわ」

「そう、僕は彼が死んだ後、実際は二人だけなんだけど、いつも三人でいるみたい」「その通り。僕も、彼女も、すぐに気付く。このままじゃいけないってね。そしてその時は意外にもすぐにやってきた」

「彼女が消えちゃったのね」

「良く分かったな」と言いながら、僕は薄気味悪いものを感じた。僕は話してるんじゃない。ある結末に誘導されているような気がした。話すよう仕向けられているのだ。

「彼女は転校したよ。小学三年生の時だったかな。僕は見送りにはいかなかった」

「どうして、付き合ってたんでしょ？」

「僕らは、二人とも、ある程度分かってたんだと思う。このままではいられないってね。だからお互い別れる時は無関心だったんだ。まあ、小学生の話だから、他の子に気が移っちゃっただけかもしれないけどね」僕は笑おうとしたが、笑えなかった。娘も笑わなかった。

「さあ、この話はおしまい。もう寝よう」と僕は言ったが、その声は娘には届いていないようだった。

娘は難しい顔をして、何かを考えているようだった。娘の見つめている先には、濃い暗闇があった。テーブルのホットミルクはもう冷めていて、湯気は出ていなかった。

「さあ、もう寝よう」と言って、娘の背中を叩くと、彼女はようやく立ち上がり、リビングを出て自分の部屋に行こうとした。でも、急に立ち止まった。

「どうした？」僕が声をかけると、娘はこちらを振り返って言った。

「もし、その話が本当なら……」娘がこんな事を言い出すのは初めてだった。この話は嘘の話を本当の話のように聞くといい遊びだ。

娘もその事は分かっているはずだった。僕は娘の小さな唇を見つめていた。

「悲しいわね。だってパパの愛が彼女を捉えた事はなかったんだもんね。彼女の愛は常に死者に注がれていた」

おい、よせよ、この話は冗談だぜ。そう言おうとしたが、喉が凍りついたように、動かなかった。

娘は僕の顔をじっと見て、闇にすうつと消えていった。僕は初めて娘を恐ろしいと感じていた。

幸いな事に明日は日曜日だ。朝からずっと、娘と二人きりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9062k/>

二つの夜

2011年10月6日04時23分発行